
平成 29 年度の博物館館園実習・見学実習について

九州保健福祉大学学芸員養成課程

平成 29 年度の博物館館園実習 (学外実習) では、15 名の実習生 (4 年次生対象) が各館園での実習に参加している。内訳は、下記の通りである (五十音順)。

いおワールドかごしま水族館 1 名
大分香りの博物館 1 名
大分市美術館 1 名
大牟田市動物園 1 名
鹿児島市平川動物公園 2 名
篠栗歴史民俗資料室 1 名
高鍋町美術館 1 名
奈義町現代美術館 1 名
名護博物館 1 名
御船町恐竜博物館 1 名
宮崎県立西都原考古博物館 1 名
宮崎市フェニックス自然動物園 2 名
八代市博物館未来の森ミュージアム 1 名

本年度は総合博物館 1 名、美術館 3 名、歴史・考古学系博物館 3 名、動物園・水族館 6 名、自然史系博物館 1 名、科学技術系博物館 1 名という動向であった。本学科学生の志向として動物園・水族館での実習参加者は多いが、例年様々な分野の館を希望している。また、熊本地震の影響によって受け入れが困難な館園が今年度もあり、同県出身受講生は実習先選択に影響を受けている。

各館園にはご多忙の中、今年度も実習生を受け入れて頂いた。感謝の意を表したい。

3 年次生を対象としている見学実習については、本年度は 10 月 21 日に例年通り宮崎県総合博物館・宮崎県立西都原考古博物館にて実施した。参加学生は 13 名であった。見学に御案内頂いた両博物館の担当者にも、改めて感謝致す次第である。

奈義町現代美術館（岡山県 奈義町）

実習期間：平成 29 年 9 月 10 日～9 月 16 日

薬学部 動物生命薬科学科

安藤 未有

奈義町現代美術館は、通称 "Nagi MOKA(ナギ・モカ)" と呼ばれ、日本を代表する世界的な建築家である磯崎新によって設計され、平成 6 年 4 月 25 日に開館した。また、館内には国際的に活躍されている荒川修作+マドリン・ギンズ、岡崎和郎、宮脇愛子の 4 人の芸術家に一般の美術館では収集不能とされる巨大作品をあらかじめ制作依頼し、全体の空間を作家と建築家とで協議し、その結果作品と建物が一体化した美術館である。

私はこの現代美術館で、平成 29 年 9 月 10 日～9 月 16 日の 7 日間実習に参加した。実習生は私を含め 2 名で、実習中は主に学芸員である館長に館の歴史や地域との関わり、美術館の裏の仕事など幅広い内容の指導を受けた。

1 日目、この日は彫刻家の芝山昌也さんの個展（『芝山昌也展ーとおい近景』）の最終日で、午後からワークショップが企画されていた。ワークショップに使用する自然石を、美術館周辺のゴミ拾いを行いながら採集した。午後からはワークショップの準備を手伝い、その後私たち実習生もワークショップに参加させて頂いた。ワークショップでは自然石に柱を立てる際に、石を加工せず、石の凸凹に木を刻んで、石と木を合わせる「光付け」という技術から発想を得た方法で、自然石と木を使った立体作品を作成した。閉館後、芝山さんの個展の片付けの手伝いを行った。作品の梱包の仕方や扱い方など貴重な体験ができた。

2 日目、月曜日だったため美術館は休みだったが、昨日に引き続き展示の片付けと作品の運び出しの手伝いをした。2 時間ほどの短い時間ではあったが、トラックにどのように作品を積んでいくのか、どう固定しているのか詳しく知ることができた。芝山さんの作品は灯籠や井戸など石を用いた重い作品が多く、移動させる作業はとても大変そうだった。現代アートの展示の梱包や運び出しの手伝いをさせてもらえる機会はなかなかないので、この 2 日間はとても良い経験になった。

3 日目、この日は主に事務作業と展示室の壁の補正を行った。封筒にシールを貼る作業では県内外多数の美術館や関係各所に連絡を取っていることを知り、その数の多さに驚いた。壁の補正はペンキで行ったが、塗り方だけでなく脚立の置き方など細かい所まで教えて頂いた。

4 日目、午前は主に館内のメンテナンス作業を行い、お昼からは神戸大学の学生さんが卒論の作成の資料として、館の設立の歴史や地元住民との関わりについて館長に取材に来られていたので同席した。話を聞いて、今まで知らなかった美術館の歴史や裏話を聞くことができ、美術館により興味が湧いた。

5 日目、毎日の清掃に加え、展示「大地」の池の清掃も行った。美しい景観を保つためには日々の地道なメンテナンスが大切なことを知った。午後からは写真家の田中園子さんの個展（『田中園子展 写真の仕事』）の準備の手伝いを

行った。写真を壁に展示する際、水平に並べるための作業は重要だけれどとても難しいことを実感した。あまり役には立てなかったが、作家さんと一緒に準備をする経験ができてよかった。

6日目、午前中は館長から企画展示の入れ替えについての説明を聞いた。その後、次回の展示をされる田中さんのお友達の作家さん達とお話をして、お昼ご飯をごちそうになった。午後からは展示室の壁の補修とチラシの貼替作業を行った。ギャラリストとアーティストのお話を直接聞く機会はそうないので、とても刺激的な一日だった。

7日目、この日は雨だったが、田中さんの個展の初日で土曜日ということもあり、朝から多くのお客さんが来られていた。午前中は展示室「月」の壁の汚れを練り消しゴムで取る作業を行なった。芸術作品としての部屋のメンテナンスを行える機会はそうないのでとても良い経験ができたが同時にとても緊張した。

今回の実習を振り返ると、初日から芸術家の方々とお話をしたり、企画展の片付けや準備の手伝いをさせて頂くなど、貴重な体験を沢山することができた。地元の美術館でありながら、今まで館について詳しく知ることもなく、行くこともあまりなかったこの実習を機に奈義町現代美術館の魅力を再確認することができた。現代美術館の裏の仕事や行政と関わりのある美術館の学芸員がどのような仕事をされているのか知ることができ、少しではあるがその面白さや難しさを知ることができた。

名護博物館（沖縄県 名護市）

実習期間：平成 29 年 8 月 17 日～8 月 30 日

薬学部 動物生命薬科

上間 愛乃

名護博物館は、昭和 59(1984) 年に開館して創立 33 年になる。開館当初からみんなでつくりあげる「ぶりでい(みんなの手で創り上げるの意)」を合言葉に子どもたちを大事な事業の柱にしてきた。「ぶりでい子ども博物館」、「高校生我がまちを描く展示会」事業などは、まさに子どもたちの持つ才能や可能性を育てる取り組みをしている。現在は、新博物館建設事業の取り組みが始まっているが、これまでの歴史や実績、みんなでつくりあげる「ぶりでい」の心を忘れずに、これまで以上に名護市民と一丸となって事業に取り組んでいる。

博物館実習までの流れは、4 月に名護博物館に実習参加が可能かどうかの連絡を取った所、学校からの書類を送ってほしいと言われたので、大学から書類を送ってもらい、参加が決定した。実習期間は 8 月 17 日～8 月 30 日の 10 日間であった。

私が、名護博物館を選んだ理由は、地元であり一番親しみのある博物館だっ

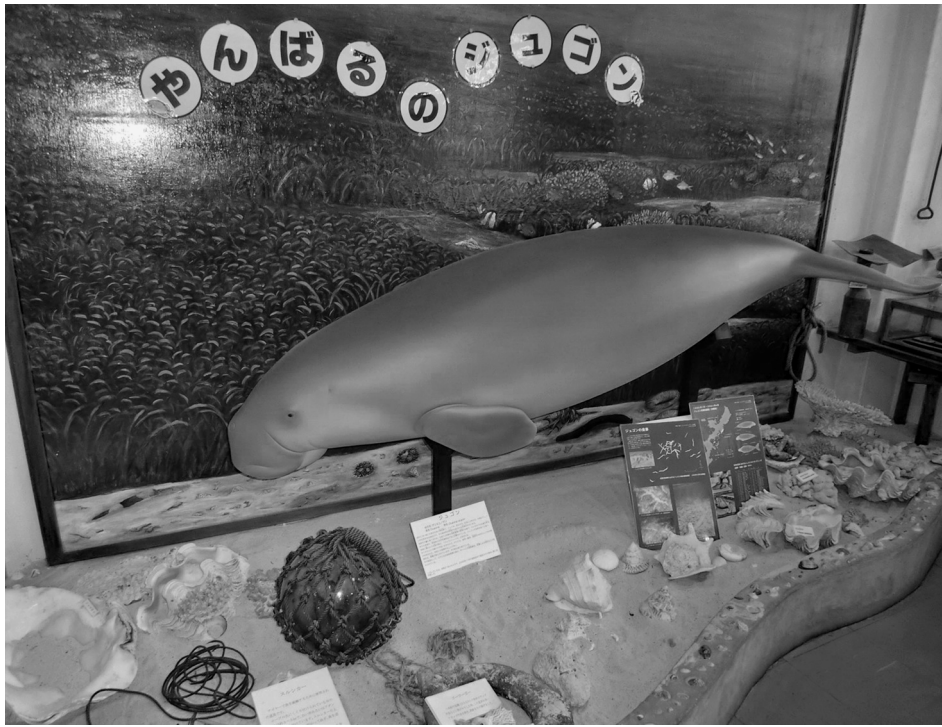


写真 1: ジュゴンの展示

た事、そして、自然を大切にしており、子供のころによく遊んだ場所であり、家から近い、地元の名護をもっと知る事ができるなどと理由は沢山ある。博物館では様々な生物が飼育されていた。私には琉球犬のソラと遊んだり、オリイオオコウモリのコモちゃんにエサをあげたりしていた思い出がある。ちなみに両者とも現在は剥製となって、今でも来館者を迎えている。

実習 1 日目の最初は、10 年研修の小中学校の教員と一緒に博物館を見学した。学芸員の村田さんが博物館の展示の案内をしてくれた。主に沖縄の歴史に



についての展示であった。第 2 次大戦中の兵士のヘルメットを食器のかわりに使っていたもの、沖縄で有名な植物であるフクギなどがあつた。様々な展示の中で最も驚いたのは、少し前まで生息が 3 頭確認されていたジュゴンが、現在は 1 頭も確認されていないとの解説で、これはとても残念だった (写真 1)。収蔵庫の中も見学するこ

写真 2: 廃園となった保育所の看板



写真 3: 埋蔵文化財の発掘調査で使用する道具類

とができた。収蔵庫の中には様々なものがあつた。私の通学した中学校や高校の制服もあつた。嬉しいことに、幼いころに閉園になってしまった私の保育所の看板ものこされていた(写真 2)。

午後になり、市内安和での遺跡発掘調査作業に参加した(写真 3)。発掘作業では、貝と土器を見つけることができた。1 日目から貴重な体験をすることができた。

2 日目の最初は「ぶりでい子ども博物館」の子どもたちと一緒に器づくりをした。陶芸家の前原和夫さんが、目の前で器を作ってくれた。30 分弱で 5 つも器をつくったので驚いた。前原さんは、沖縄で唯一となった赤瓦を作っている職人である。

次にハンドストッパーで手作りのおもちゃを作った。子供に教えるのが難しかった。ムカデ、金魚、風車、手裏剣などを作った。他にも様々なおもちゃが作ることができる。

3 日目の最初は村田さんによる川の生き物の講義を受けた。そして、午後から川歩きをし、様々な生き物を観察することができた。その日の夜は数久田区にある轟の滝に生物と植物の調査に行った。轟の滝が公園になるので、そのポスターを名護博物館が作成するとの事。生物や植物を沢山撮影した。

4 日目は、3 日目の夜に取ってきた生物と植物の同定作業、自然史資料登録整理をした。そのあとに館内会議にも参加した。午後は、市史編さん室、文化財資料整理室、源河川、壕、嘉陽層、断層、恥うすい碑を見に行った。

5 日目の最初は、歴史民俗資料の登録について学び、作業に従事した。実際に寄贈品の聞き取り調査にも行き、午後からは寄贈品が置かれている倉庫の整備をおこなった。

6日目の最初はトーフづくりをした。昔使っていた道具を使う体験もできた。トーフ尽くしの昼ご飯であった。午後から、ぷうみちゃ、ナナシキムイの碑、文築記念碑、屋部の久護家、そして津嘉山酒造を見に行くことができた。津嘉山酒造の工場は昭和初期の建築で、唯一重要文化財の中でお酒を造っているとの事。

7日目はアリのモニタリング調査をOIST(沖縄科学大学院大学)の生物多様性・複雑性研究ユニットの皆さんと子ども達とで行った。アリの検索表などがあり面白かった。その後に、自然史登録作業をした。鳥とハブの自然史登録作業を行った。

8日目は、源河川自然観察学習をした。様々な生物を取って観察し、その後には滝登りを体験した。蚊に沢山かまれて痒かった。取ったテナガエビは、美味しく頂いた。

9日目の最初は、キャプションづくりをした。沖縄北部の川の名所を全部書いた。次に資料の撮影の方法、カメラの使い方を田仲さんに学んだ。資料の撮影はとても難しかった。また、10日目の最初は9日目に撮った資料の写真の評価を田仲さんにしてもらった。左と右でホワイトバランスが違うのが分かる。ホワイトバランスの調整はとても難しく苦戦した。次に館内会議をし、名護博物館の活動の講座を伊良波さんにしてもらった。新館の設立が楽しみになった。そして最後に友寄さんに草木遊びの、馬やサン(魔除け)の作り方を教えてもらった。私はとても下手くそだった。

実習を終えて、普段することができない、貴重な体験をすることができたと思った。学芸員は様々な事をしていて、そこから学ぶ事が沢山あった。また、名護博物館で実習に参加し、地元の歴史、文化や自然を地域の人達と守っていきたくて強く思うようになった。

御船町恐竜博物館(熊本県 御船町)

実習期間：平成29年9月5日～11日

薬学部 動物生命薬科学科

尾方 愛理

私は今回、熊本県御船町にある御船町恐竜博物館において、7日間の博物館実習に参加した。白亜紀後期の恐竜化石の産出量が日本一を誇る御船町立の博物館である。平成24年にモンタナ州立大学附属ロッキー博物館が連携機関となり、平成26年には新館がオープンし今に至る。館長や主任学芸員をはじめ、エディケーター、デザイナー、プリパレーターと役割が充実している博物館でもある。

7日間で行われた主な実習内容は、化石のレプリカ・型作り、クリーニング体験、土日に行われるイベント運営のお手伝い、課題実習である。その他にも

化石産出地・収蔵庫への同行や、開催されていた特別展のギャラリートークにも参加させてもらった。

1日目の午前中は隣接施設である町役場の教育委員会の方のところへ挨拶に伺った。私を含め実習生は5人で、挨拶を終えた後、博物館に戻り常設展示を各自見て回った。あえて本物の化石部分とレプリカ部分ができるように色に差を付けている事を、説明を聞いて初めて知り印象に残った事を覚えている。その後は期間中に完成させる課題実習について説明があり、パネルを完成させるのか、イベントの企画を一つ考えるのか等を各自考える時間を頂き、何度も添削してもらいながらテーマを決めていく作業を行った。また、レプリカ作りも同時進行した(写真)。

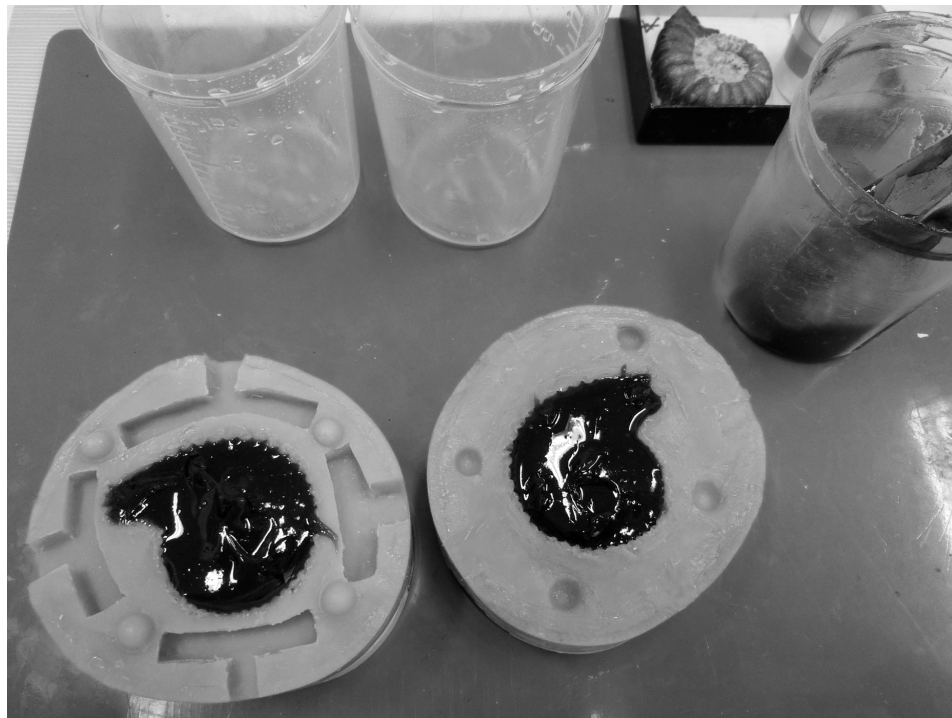


写真:レプリカの作製

レプリカ作りと課題実習は、1日目～7日目まで作業を続けた。まず、レプリカ作りについて紹介する。はじめに取り扱ったのは石膏であった。これは土曜日のイベントでよく行われている「わくわく体験教室」の内容の1つで、子供でも簡単に作ることができるレプリカだ。作り終えるまで15分程しかかからず、色も好きに塗ることができる。子供たちは喜んで作るのだろうな、と想像しながら自身も楽しむことができた。石膏での体験が終わった後は、いよいよ本格的なレプリカ作成に入った。この作業には多くの先生が指導して下さり、時間がかかることが分かった。正確さ・几帳面さが求められ、手を抜いてしまうとレプリカに気泡ができたりしてしまう。また、より本物に近くするため着色したが、色の加減が難しかった。何度も型が使えるように強度も工夫されていて、イベントにも再利用したりと、活用法が多くあり驚いた。シリコンが固まる時間は想像以上で、最終日のギリギリまで作業を続けた。レプリカにはこのように時間と手間が費やされていることを知り、大変さが身に染みた実習と

なった。

次に課題実習である。ヒントを得るため常設展示を一度じっくり回ってみた。すると、恐竜は種ごとに手に違いがあることに気付いた。これは考えてみると当たり前のことだが、来館者は全体を見て素通りするだけで、こういった違いに気付いてないのではと考え、「翼」に注目してみた。対象としたのは、翼竜・鳥・コウモリだ。図鑑やインターネットの他、恐竜学の本も貸して頂き、これら3種について理解することから始めた。調べていくうちに分かったことは、発達している指の違いであった。キャプションを考え、図を用いるためイラストレーターを使用した。パネル作りではデザイナーの方に細かいところまで教えてもらい、色の見やすさ、印刷した時の印象の違い等を学ぶことができた。そして、どのような言葉を使うと子供でも分かる簡単な少ない文章で、正確に理解してもらえるかも改めて学ぶことができた。レプリカ作りや、他の作業の合間に取り組んだものだったが、実習生同士の意見交換等もすることができ、多くの考えを取り込めた体験となった。

クリーニング作業を4日目に行ったが、初めての感覚であり、化石が傷つかないように最も慎重に行った。集中力と技術が必要であると感じながら、私は変な汗をかいていた。イベント運営のお手伝いは土日、5日目と6日目に行った。土曜日は小学生未満から低学年向きのコースタ作り、日曜日は古生物学者への扉というパレオプログラム、小学生高学年向きのイベントだった。ただ楽しんでもらうだけでなく、恐竜とはどういった生き物かという簡単な興味を引くことだけでも、こういったイベントを開催する価値があるということをエデュケーターの方に教えて頂いた。実際に子供たちに教えていくと、発する言葉の難しさを感じた。分かるように簡単に伝えることは、私自身、今後の課題である。

この実習を通して、はじめは専門外のことであるし、専門用語など分からずついていけないのか不安だったが、学校で学んでいることが基礎となっていることを改めて感じた。また、1人ひとりがもっている役割を最大限に活かすことができている博物館であると感じ、展示物の工程やイベントの意図など沢山のことを学ぶことができた。来館者にどう伝わるか、正確に伝わっているかを知るためのアンケートも充実しており、何より御船町の方が多く来館されていることに驚いた。地域との連携や、信頼、個々の技術を活かすということ、「伝える」ということの重要性、言葉の難しさといった沢山のことを吸収できた貴重な7日間であった。

大牟田市動物園（福岡県 大牟田市）

実習期間：平成29年9月4日～9月10日

薬学部 動物生命薬科学科

亀崎 茉優



写真 1: ふれあい広場の写真

私は大牟田市動物園にて7日間の実習に参加した。大牟田市動物園は福岡県の大牟田市の延命公園内にある動物園で、1941年に「延命動物園」という名前で開園され、「動物をとおしたところの交流」をコンセプトに様々な取り組みがされており、環境エンリッチメント大賞2016を受賞している。

1日目はモルモットや、ウサギ、キツネ、ヤマアラシなどの動物舎の掃除や餌の用意などの作業を行った。モルモットは約80匹いるそうだが、担当している飼育員さんはすべて見分けることができ、名前を憶えているようだ。ふれあい広場のふれあい台や移動させるためのゲージなどは飼育員さんの手作りとのことだった(写真1)。掃除や餌やりなどを行い、モルモットの手術の様子なども見せて頂いた。午後は最初に調餌場で野菜を切る作業を行い、その後もう一度モルモットの獣舎の掃除を行った。頭数が多いのでこまめに行っており、行動や糞便の様子などを観察しているようだ。私は今回掃除をしている時そこまで気がまわらなかった。キツネとヤマアラシは餌やりや体重測定を見学した。餌はすぐに食べてしまわないように隠しながら与えるなどの工夫を教えて頂いた。

2日目は園内の獣医の方の仕事の見学、さらに作業を行った。診療所内に入入りする動物たちの水入れを洗うなどの作業の後、前日に手術をしたり体調の悪いモルモットの注射や投薬の様子も見ることができた。その後は餌の用意に取りかかり、作業では動物園全体の動物たちの餌の野菜の仕分け作業を行ったが、動物種や、場所ごとに量が決まっていたので分けていき、鳥類用の餌切り作業。餌は飽きないようになるべく日ごとに餌を変えているとのことだった。腎臓などを切ったが、それはイヌワシ用の餌で、目が見えないので、毎日食べさせて



写真 2: 餌を食べるケヅメリクガメ

いるらしく、その餌やりも体験した。ピンセットを使い、餌を嘴にあてると口を開いて食べていた。貴重な経験ができた。そのほかにも、ライオンの無麻酔採血の様子も見せて頂く事ができた。日頃からのトレーニングを行っているとのことで、一人が餌をあげながら気を引いて、柵の近くの台にライオンを誘導し、伏せをさせ、柵から尾を出し採血するという方法が採られていた。日頃からトレーニングをしているためか、ライオンも暴れたりせず、なんともないといった様子だった。大牟田市動物園は今年の5月に、国内初のトラなどの大型ネコ科の動物での無麻酔採血に成功している。

3日目はまず、ケヅメリクガメの飼育場の掃除を行い、餌の小松菜を枝にぶら下げたり、枝にさして吊るす作業を行った(写真2)。その後、レッサーパンダの動物舎へ行き、餌の準備を行った。また、環境エンリッチメントについて教えて頂いた。実際にレッサーパンダの室内の展示スペースは、昔私が大牟田市動物園に伺ったときに見た様子とかなりの変化があった。木や枝を沢山配置する事で高さを出し、あまり広いとは言えない室内でも動物たちが動き回れるようになっていた。枝はきちんと取り付けてあるものと動かせるようになっていたものがあり、動かすことで少しでも新鮮な気分させるとの事である。枝の間などに餌を隠し探索させるそうで、リンゴを隠す作業を行った。しかしこれでは、食べる事のできる個体とできない個体が出てくるので、そこを補うためにトレーニングを行い、体重測定などの健康管理をしっかりと行って調節していると教えて頂いた。その後、カピバラの餌の用意を行った。元々ゾウのいた動物舎の中に、木材でカピバラの部屋が作ってあった。その後キリン舎の掃除を行った。掃き掃除で、砂が敷き詰めてあり砂まで取り除いてしまわないように、塵取りが手作りされ、網になっていて糞だけを取れるようになっていた。砂が敷き詰められているのは蹄を傷つけないためだそうだ。午後の作業はまず、カ



写真 3: ハズバンダリートレーニングの解説パネル

ンガルー用の野菜とペリカン用の餌を用意した。切り方にも工夫があり、手(前肢)を使える動物用には持ちやすいように切るそうだ。ペリカン是国内最高齢の55歳だそうだ。ほかにもオウギバトの水入れを洗いながら、親子3羽それぞれの見分け方を教えて頂いた。オウギバトは母親が育児放棄したため人工保育のヒナがおり、そのヒナへの餌やりであった。餌をあげる前と、あげた後に体重を測りどれくらい食べたかを確認した。

15時からキリンのハズバンダリートレーニングガイドの様子を見学した(写真3)。ハズバンダリートレーニングとは受診動作訓練と言い、動物に世話がしやすいように飼育動物に行うしつけである。飼育員、動物共に安全を確保する事ができ、笛の音や手の動きの合図で特定の姿勢を取らせるなど、ストレスをかけずに手足を出させたり、口を開けさせたり、方向転換などができる。今回は採血と体温測定トレーニングだった。このような説明をかみ砕きながら来園者に説明していた。

4日目も同じ作業を行ったが、雨で、雷もなり始めた。キリンの動物舎は建物が高く雷が落ちる可能性があり、そのような時はこまめに様子を見に行くそうだ。

5・6日目はサルやツキノワグマ、ミニブタ、ゴマフアザラシなどの作業を手伝った。初めに、リスザルの餌を分けフィーダーというエサ入れに入れる作業(写真4)。フィーダーは容器や竹筒などに穴が開いていて、そこから餌が出るようになっている。この道具であたえることで餌を食べるのに時間をかけるようになり、これが運動や頭の体操にもなるそうだ。リスザル以外のサル舎の掃除を行い、餌をフィーダーに入れた。ミニブタは、洗い物や掃除を行った。作業の



写真 4: 解説付きで展示されているフィーダー

途中で、新しく作成するパネルの話し合いをされていて、その間、以前のパネルや、作り替えたパネルをまとめたファイルを見せて頂いた。以前のものには悪かった点などが書かれ、それを作り替えた新しい物には、改善した点などがまとめられていた。新しいものは、わかりやすく、かわいらしくなっている印象だった。樹上性の高い種類のサルの檻の屋根に餌用の葉のついた枝を置く事で、少しでも野生に近い行動を引き出す工夫をされているとの事だ。

7日目、最初にライオンやユキヒョウの展示場の窓拭きを行い、餌の肉を色々な所に隠した。他にもラマ舎やヤギの展示場の掃き掃除などを行い、ラマは点眼やそのためのトレーニングの様子を見学した。また、インコの水浴びのためのトレーニングも見学した。霧吹きで水をかけて、水に慣らしているとの事だった。その日はイベントも多く行われていた。獣舎の裏側、檻越しにライオンが肉を食べる所を間近に見学できる『ライオン舎の裏側探検』や『ライオンの肉探しタイム』という、ライオンをいったん獣舎に戻し、肉を隠した後にもう一度出して、隠した肉を探している様子を観察できるといったイベントが行われていた。どのイベントにも沢山の人が集まっていた。

今回この博物館実習で、動物園で行われている様々な工夫を知る事ができた。飼育員の方々は来園者を楽しませるのはもちろん、動物が安心して暮らせるように日頃から多くの努力をされているという事がわかり、大変貴重な経験であった。

宮崎市フェニックス自然動物園（宮崎県 宮崎市）

実習期間：平成 29 年 9 月 4 日～ 11 日

薬学部 動物生命薬科学科

嶋田 淳也

博物館の存続には地域との連携が必要となる。これは博物館が一部で「金食い虫」と呼ばれるように、市民の税で成り立っているからだ。そのため、いかに支出を抑えていくか、地域に受け入れられていくのかを考えていく必要がある。今回実習を受け入れて頂いた宮崎市フェニックス自然動物園も存続の危機にさらされた事があったが、市民の強い要望により今日まで至っている。そんな、市民とのつながりの深い園で、どのように市民に対し動物を展示していくのか、地域連携はどのように行われているのかなど、様々な事を学べるのではないかと思います、この動物園を志望した。

ここではお正月や節分などの動物主体のイベントを行っている。来園者主体のイベントの主なものとして愛鳥週間に親子参加型の巣箱作り、小学生を対象としたサマースクールなどが行われている。今回の実習では子供絵画展が行われていた。

子供絵画展では約 1 万にも及ぶ絵画の中から最優秀賞を決めるもので、その仕分けを手伝わせて頂いた。子供たちは動物園の動物をそれぞれ描いており、ここには動物の名前までしっかり記載されていた。地域とのつながりを見ることができた。

キャプションは対象に分かりやすく的確に伝えるものである。大学の講義でキャプションの作成を行った事があるが、老若男女問わず伝えられるものを作る事が難しかった。しかし動物園でのキャプションは老若男女問わず楽しめるものであった。特にカピパラのキャプションは面白く、硬い内容を書く事に縛られていた私の思考では作る事のできないものであった。



写真：飼料を準備する

実習内容は清掃と給餌が主であった(写真)。清掃は朝、夕の2回に分け行われ獣舎は清潔に保たれている。一日の中で最も時間がかかるため、効率化が必要だった。また、フンは体調の指標ともなるため観察をする必要があったが、時間に追われうまく観察できなかった。

餌は自然界で食べているものではなく、野菜や鶏肉あるいは配合飼料で構成されており、栄養価の考えられたものであった。これは自然で食べられている餌を理解し、代わりになるものを考えていく事がカギとなると言う。フラミンゴの餌にニンジンのジュースが使われていることは驚きであった。フラミンゴは色素を餌から摂取するためオキアミを餌として与えている。しかし自然界では赤い色素を持つ藻を食べており、オキアミだけでは食物繊維は摂取できない。そのためニンジンジュースに餌に混ぜているというのだ。普段、大学内の飼育実習では決して学ぶことのできない貴重な経験であった。他にも、園内に多く生えるカナリーヤシを採取し餌として利用していた。好んで食べる動物も多く、展示の一つとしても見て取れるものであった。また、この事はエサ代をいかに抑えるかという経営に関わる視点も見出す事ができた。

時間に合わせいくつかのイベントが行われる。まずはヤギの行進だ。普段飼育スペースでおっとりしている動物が走っていく姿は圧巻であった。ヤギの習性が利用されており近づいても列を乱すことはないため、すぐ近くまで近寄ることができる。子供から大人まで見て楽しめる展示であり、教え込まれたように一斉に走っていく姿は見物である。ヤギがなぜ一斉に走っていくのか、という疑問に答えられるよう、イベント中は多くの飼育員がそばに立っていた。

次はフラミンゴショーだ。イベントの中でも最も集客数が多い。以前、当園の出口園長の講義で拝見した事はあったものの、実際に見るのは初めてだった。フラミンゴショーのナレーションでは膝の曲がり方の違いや赤色の理由、世界中のフラミンゴの種類などを子供にもわかりやすく説明しており、文字だけがキャプションではないことを知った。

私が体験したイベントは上記の二つであったが、ほかのイベントにも様々な工夫が凝られていると思い、再び動物園を訪れたいと思っている。

当初の目的であった、地域とのつながりについて深く学ぶ事ができた。キャプションや展示方法についていかに来園者に理解してもらうかなどの工夫も、講義では学べないものであり、有意義な実習であった。

大分香りの博物館（大分県別府市）

実習期間：平成 29 年 8 月 17 日～ 21 日

薬学部 動物生命薬科学科

末 智見

大分香りの博物館は大分県の別府市にあり、学校法人別府大学の創立 100 周

年事業として、「心豊かで夢と活力溢れた地域づくりを目指す大分県」の発展に寄与するため、旧「大分香りの森博物館」より貸与された貴重な収蔵品 3,625 点をもとに、開館した。観光から教育・研究利用まで、幅広いニーズに応えるマルチ対応型ミュージアムを目指している博物館である（同館「開館経緯」より、<http://oita-kaori.jp/museum/about/about.html>：平成 29 年 12 月参照）。1 階部分は香りに関する物を売っているミュージアムショップ、ハーブティーやコーヒー、軽食などが食べられるカフェが併設されている。1 階の展示部分は 2 つのエリアに分かれている。香りはどのように作られて、どのくらいの種類があるのか、香料の紹介や調合方法を紹介しているエリアと、世界の香水を紹介しているエリアに分かれている。2 階部分は、世界の香りの歴史と人々の関わりを展示している。3 階部分は、アロマ体験や調香体験の体験ゾーンと企画展に分かれている。

実習では私の他に 3 人の実習生が参加しており、調香師の方に毎日指導して頂いた。

実習 1 日目は、朝 9 時 30 分から植物園の掃除と朝礼。10 時から香りについての講座を 1 時間行った。香りには天然性と合成香料両方が使われていて、天然性の中でも動物性と植物性に分かれている。動物性の香料は世界中に 4 種類しか無く、香水を作る時この 4 種類のうち 1 種類以上入っていないと売れないらしいことや、香水にはトップノート、ミドルノート、ベースノートに分かれている事などを教えてもらった。11 時から全ての展示を見て回り、12 時から、1 時間の休憩。13 時から 1 階の展示の解説をしてもらった。14 時からそれぞれの作業に分かれて、私は調香体験の調香ボトルの組み立てを 2 時間行った。16 時 30 分からは実際に調香体験をし、17 時に帰宅。

2 日目は、1 日目と同じく 9 時 30 分から植物園の掃除と朝礼をし、10 時から 2 階の展示の解説を聞いた。かなり昔から世界中の宗教行事に香りが使われていた事がわかり、日本では特に平安時代の貴族の間で日常生活に使われていたり、遊びにも使われていたという。11 時から 1 階と 2 階にそれぞれ分かれて解説をした。この時は 2 階を担当し、来館者に解説を行ったがとても難しく、苦勞した。12 時から 1 時間休憩をし、13 時から次の日行われる親子調香体験の準備を館長と行った。プリントを席に置いたり、調香体験の香水ボトルを並べたりした。親子調香体験では実際のハーブを植物園で見て学ぶコーナーもあり、私たちはそこで植物の名前や実際に植物の匂いを嗅いでもらうために、館長から植物の名前やどこにあるかの説明を植物園に出て教えてもらった。また、私たちはどういった作業をするのかの段取りもあった。16 時 30 分からは、香りの講座。アロマによって病気や体調が変化する事を学んだ。

3 日目、8 時 30 分から植物園の掃除と親子調香体験の準備が伝えられ、9 時から 3 階で最終的な配布物やハーブの設置をした。来館者に対して植物園に出て、このハーブはどういった効果や使われ方をしているかといった説明を行った。3 階に移動し、さらにアロマの効果についての講座やハーブからアロマは

どうやってできるかの講座があり、実際に蒸留器でローズマリーからアロマを抽出しているところを見学してもらったりした。次に、香水作りを体験してもらった。私たちは、答えられる範囲で質問に答えたり、困っている方の対応をしたりなどの補佐作業をした。12時過ぎに終わり、片付けをし、12時30分から休憩。13時30分から3階の展示の解説をしてもらい、歴史によって香水に変化があったり違う種類の香水なのに同じ香水ボトルが使われていたりしている事を知り、とても驚いた。14時から、またそれぞれ分かれて来館者への解説、今回は2階の担当だった。2回目ということで1回目よりうまく説明ができたと感じた。1時間早めに来たので、16時に帰宅。

4日目、9時30分から植物園の掃除と朝礼。10時から、それぞれ分かれて作業をした。私は、ショップで商品のラッピングやテスターの補充、棚のほこりを拭いたりした。12時から休憩をし、13時からまたそれぞれ分かれて作業。今回は3階の解説を担当した。16時からは香りの講座があり、最終日に香りを嗅いで名前を当てるテストがあるのでその勉強をした。何回やっても名前と香りが一致しないので、とても難しかった。

5日目、9時30分から植物園の掃除と朝礼。10時からそれぞれ分かれて解説。今回は1階部分を担当した。1回目の時と比べて来館者に説明ができるようになったと感じた。12時から休憩をし、13時からまたそれぞれ分かれて作業。私は2階の解説を担当した。14時から前日勉強した香りについてのテストを行った。香りの名前と香りのイメージ、体験型博物館とは何が大事なのか、そして実習を通して学んだ事の4問でした。香りと名前が難しく苦勞した。15時に帰宅。

5日間の実習を通して香りについて、少しは詳しくなれたと思う。香水は香水ボトルにととてもお金をかけて作られていたり、香水のアカデミー賞と言われるFIFI賞が存在する事。世界中で宗教行事やおしゃれとして昔から香りが使われており、ミイラの中に桂皮が入っていて香りとしてでは無く殺菌効果が期待されて使用されている事など、香りは楽しむ物だけではなく、いろいろな使われ方をしているのがわかった。また、親子調香体験では普段の生活で子どもと接する事があまりないのでとても苦勞したが、良い経験になったと感じている。

西都原考古博物館 (宮崎県 西都市)

実習期間：平成29年8月29日～9月5日

薬学部 動物生命薬科学科

武石 大

西都原考古博物館は、宮内庁が管轄している陵墓参考地である男狭穂塚・女狭穂塚を含む西都原古墳群と一体となったフィールドミュージアムとして、平成16(2004)年に開館した博物館である。実習先に選んだきっかけは、3年次に

表：西都原考古博物館での博物館実習プログラム日程

	9:00～10:00	10:00～12:00	12:00～13:00	13:00～15:00	15:00～16:30	16:30～17:30	17:30～18:15
8/29(火)	開館準備	オリエンテーション	昼休み	展示室見学	館内案内 (バックヤード)	特別展示 説明	実習日誌
8/30(水)		講話		館内案内 (展示室)	保存処理	課題	
8/31(木)		開館見学＆竹収集		保存処理			
9/1(金)		体験館業務		体験館業務			
9/2(土)		古墳見学		保存処理		古墳見学	
9/5(火)		講話		課題			

授業の一環である博物館見学の際に同館を訪れた際、雰囲気や設備、物事の捉え方に強く魅かれたからである。

私はこの西都原考古博物館にて8月29日から9月5日までの(3・4日を除いた)6日間実習に参加した(表)。事前の打ち合わせが一度、西都原考古博物館にて行われ、実習に必要なものや通学方法の確認、実習中の課題について等を聞くことができた。この期間の実習生は私一人であったが、インターンシップの他大学の学生1名と共に参加することとなった。初日の服装は、館長や職員の方々に挨拶をするためスーツ、2日目以降は普段着で通った。

実習は毎日、開館準備から始まった。開館前の展示室で、アルコールとウエスを用いて展示ケースを拭く作業を行う。ハンズオン展示や露出展示が多いため、資料に破損やずれがないかを確認する事も重要である。

展示室見学では、実習の前後で学芸員として博物館に対する視点がどれほど変わるかを知るために、説明を受けずに一人で展示室を見学し感想を記録した。一度見学にしていたものの、実習後に再び感想を書いた際にはさらに多くの知識が入っていて、現場を見ることの重要性や様々な視点を持つことの難しさを感じた。

館内案内では、展示室とバックヤードの説明を受けながら館内を見学した。展示室では、触察ピクトと呼ばれる立体サインや音声ガイドジャケット、多言語ガイドなどのユニバーサルデザインの考え、ハンズオン展示や露出展示、常新展示の考え方を多く取り入れていることが分かった。特に触察ピクトは、一見時代にそぐわないように思えるが、ユニバーサルデザインという考え方においてとても優れていると感じた。バックヤードでは、燻蒸を使わずにカビや害虫の発生を防ぐIPMの考え方に基づいた資料管理を行っており、温湿度管理や清掃活動等、細心の注意を払う事や、資料を温度や湿度に慣れさせるために、いきなり収蔵庫には入れず「ならし」をする事が大切であると分かった。展示室や収蔵庫の環境を見学し、教育普及と資料保存を両立させる難しさを感じた。

講話では、博物館とは何か、種類や仕事・職員構成について学習した。博物館概論などで学んでいた内容も含んでいたもので、理解がしやすかった。また、中高生たちの博物館に対するイメージや、現場としての課題を理解した。中高生たちの持つイメージや博物館に行かない理由として「その場にしかないものを見る事ができる」といった肯定的なものもあったが、反対に「一度行った事があるから」「いつも同じ展示をしている」といった否定的な意見が多くあり、

日本の博物館の置かれている現状を感じた。それらの課題を克服するために西都原考古博物館では「常新展示」と名付けられた、可変性のある展示を取り入れていた。

保存処理では、鉄製品の保存の説明や人骨庫の地震対策を行った。鉄製品の保存処理の説明を受けている過程で、いくつかの遺物に触れている時にふと、「古墳時代の人々が作り使われていたものが、長い時を経て今この瞬間自分の手で触れているのだ」という感覚を持った。それはとても不思議な感覚で言葉などでは到底説明のつかないものであった。学芸員は過去を知る過程で、遺物に直接触れこの感覚を知るところから始まる。来館者にも過去を知ってもらうためにハンズオン展示によって、質感は勿論、この感覚を知ってもらうことが重要なかもしれないと理解し、そのニーズについての理解が深まった。人骨庫の地震対策は木で作られた棚に落下防止用のベルトをドリルを使いネジで固定していく作業で、慣れない作業であったうえに資料が近くにあったため、とても神経を使った。

開梱見学では、国際交流展で展示される台湾の十三行博物館から来た資料を開梱していく様子を見学した。本来は一部の学芸員や運送業者しか絶対に立ち会ふことの出来ない空間である。資料を一つずつ取り出し、形や重さ、ビーズの数等を、全ての資料が写真とサイン付きで記載されている分厚い冊子で確認していく作業だった。厳かな雰囲気で作業が進む中、時折会話や冗談が飛び交っている様子だった。信頼があるうえでの国際交流展であると感じた。

体験館業務は、竹の収集や火入れ、ワークショップを行った。9月10日に行われるワークショップのために、子供たちが割りやすい大きさに竹を切って集めたり、茅葺きの屋根を長持ちさせるために火入れをしたりと、力仕事もあった(写真)。実習4日目の9月1日には、台湾から団体のお客様がきたので、勾



写真：復元茅葺き建物の屋根を火入れするために薪を準備する

玉づくりの手伝いをした。私自身、勾玉を作る前だったため、体験館の方に手順を確認しながら行った。通訳の方は一人だったため、基本は簡単な英語で話す形でコミュニケーションをとった。ワークショップは問題なく終わったが、学芸員にはコミュニケーション力も必要であると感じた。

古墳見学は、車で移動をしながら古墳に関する説明を受けた。博物館資料だけでなく、フィールドを実際に見る事によってより考古学への関心が深まった。

課題は、説明パネルの作成をした。私は古墳の表面に敷き詰められている「葺石」について、Word と PowerPoint で作成した。誤った内容を記載しないように、子供向けにもわかりやすい文章にするなど、多くの時間をかけて作成する過程で、的確に情報を伝える難しさを感じた。

この実習では、「収集」「整理保存」「調査研究」「教育普及」という 4 つの博物館や学芸員の役割全体を学んだ。現場を知ることによって、これらの 4 つはそれぞれに明確な役割の違いはあるが、関係性は密接なものであると感じた。資料管理に細心の注意を払うことによって、他館から信用を得る。それによって新たな資料を収集することができ、より良い展示につながっていく。博物館のより良い環境は、博物館に関わる全ての人の責任ある仕事によって保たれているのだろう。

鹿児島市平川動物公園（鹿児島県 鹿児島市）

実習期間：平成 29 年 9 月 1 日～9 月 8 日

薬学部 動物生命薬科学科

田中 映見

鹿児島市平川動物公園は大正 5(1916) 年に鴨池動物園として開園され、昭和 47(1973) 年に現在の平川動物公園として新しく開園した。「人に、動物にやさしい動物公園」・「南国鹿児島らしい特色ある動物公園」を目指し、現在リニューアル事業が行われている（「平川動物公園リニューアル事業」より、<http://hirakawazoo.jp/shisetsu/gaiyou> 平成 29 年 12 月確認）。

今回の実習では前半 5 日間を飼育実習、後半 2 日間を教育普及活動の実習という内容で参加した。

初日、アフリカの草原ゾーンのカバとキリンを中心に飼育実習を行った。8 時ごろから昼までカバの外プールと寝室のプール掃除をした。カバ 2 頭の水分を大量に含んだ糞の多さと重さ、そして鹿児島の暑さは思っていた以上だった。午後からはキリン舎の掃除、キリンの投薬の見学、カバ、キリン、ダチョウ、フラミンゴの給餌を行い、17 時過ぎに終了した。

2 日目はインドの森ゾーン、オーストラリアの自然ゾーン、リスの森の飼育実習を行った。8 時頃から、インドゾウの健康チェック、トレーニング、治療の見学、給餌、ゾウ舎の掃除を行った。インドゾウの雄がちょうどマスト期（ゾ

ウの発情期)で攻撃的になる時期であったため、職員の方はいつも以上の緊張感で健康チェック、トレーニングを行っていたそう。その後カンガルー、クジャク、ペンギン、カワウソ舎の掃除を行った。午後からは、ゾウの間食になる木の収穫、ペンギンのごはんタイムの見学、ゾウ、カンガルー、カワウソ、リスの森の動物などの給餌を行い、17時半ごろ終了した。

ペンギンのごはんタイムは毎日行われていて、職員の方は来園者に1日1つ覚えて帰ってもらうため、その日の客層に合わせ話す内容を変えるなどの工夫をされているそう。ペンギンについて多くの知識を持っていないとできないことなので、職員の方の熱心な姿勢が印象的だった。

3日目はふれあいランドで実習を行った。ここには、ロバ、山羊、羊、ウサギ、モルモットなどがおり、その飼育舎の掃除、給餌、1日2回1時間半ずつある、ウサギとモルモットのタッチングの時間の来園者への対応を行った。タッチングの時間は日曜日だったこともあり、300人以上の参加で大変混雑した。そうした状況でどうやって平等にふれあいを行ってもらうか、動物にも人にも事故が起これないような声かけ、目配りなど気を使うことが多く、職員の方にとってはとても大変なイベントだと知った。

4日目は鹿児島県の動物ゾーン、爬虫類・夜行性動物館で実習を行った。爬虫類、タヌキやキツネなど鹿児島県で保護された動物、ヤマアラシ、夜行性動物、猛禽類の飼育舎の掃除や給餌を行った。午後にイノシシのトレーニングの見学をした。職員が安全に飼育を行えるよう、また、治療が必要になった場合獣医が処置を行いやすいよう、注射の痛みなどに日頃から慣れさせるため毎日トレーニングをしているそう。クリッカーを使い、鳴らす回数や強さを変えたり、ご褒美の餌に差をつけたりすることでトレーニングしていた。クリッカーを鳴らすタイミングやご褒美をあげるタイミングがポイントで、実際にやらしてもらったが難しかった。

5日目はヤクシマザル、レッサーパンダ、ツルの飼育実習を行った。午前中はまず、ヤクシマザルを2つにグループ分けした。日本のサルは主にメス中心に社会を作るため、平川動物公園のヤクシマザルは1頭のメスによる他のサルへの圧力などの影響でハゲが目立つ個体がほとんどだった。その対策で、相性が良い個体同士で別々の部屋に分けた。

次に、レッサーパンダの餌になる笹を、動物園が管理する山に収穫しに行った。笹はあまり日持ちしないため週に2~3回、3~4本収穫しに行くそう。

午後からは、ツル舎、レッサーパンダ舎の掃除や給餌をした。レッサーパンダの給餌と同時に採血や聴診のトレーニングをしていたので見学した。

6日目と7日目は教育普及活動の実習を行った。6日目の午前中は、1時間程度座学を行った後1つ目の課題のキャプション作りをした。シンプルで誤解のないよう適切なものを作るのは意外と難しく時間がかかった。午後は、動物園内にあるピクトグラムやビューイングシェルターなどの説明を学芸員の方にして頂いた。その後、2つ目の課題のキリンの行動観察をした。瞬間サンプリング

法を使い、1歳の雄キリンの行動観察を1時間行った。

7日目、午前中は鹿児島市内の公民館での出張講座の見学をした。出張講座は、月に4、5回鹿児島県内の色々なところから依頼され、行っているそうだ。講座の話の内容がより伝わりやすいよう、聴いている方の年齢に合わせて豆知識や問いかけ、身近での出来事を混ぜながら話していて、とても勉強になった。午後からは、3つ目の課題作りを行った。ある動物について来園者に見せるための掲示物を作るというものだった。私は、2日目のペンギンのごはんタイムで聞いた話がとても印象に残っていたため、ペンギンの生息地についてまとめた。限られた時間の中で調べたことをわかりやすく伝わるようまとめたつもりでも、相手には意図通りには伝わらなかったり、情報不足でやや不確かな記述があったりと、難しさを改めて実感した。

今回の実習では、来園者と動物にとってより良い動物園を作る為の様々な工夫や取り組みを体験しながら学ぶことができた。1日中ほぼマンツーマンで職員の方に教えてもらい、動物や動物園に対する考えや思い・多くの知識を得る事ができた。また、めったに近づけない動物に触れる機会も多くあり、忘れ難い実習であった。

鹿児島市平川動物公園(鹿児島県 鹿児島市)

実習期間：平成29年9月1日～9月8日

薬学部 動物生命薬科学科

中田 貴晴

鹿児島市平川動物公園は鹿児島県鹿児島市にある動物園で、その前身である鴨池動物園開園から2016年で100周年を迎え、日本では4番目に開園した動物園である。無柵放養式展示の施設が多く、動物展示施設のほかにもどうぶつ学習館という学習施設もあり、園内には遊園地や売店、レストランが併設されている。

私は平川動物公園にて9月1日から9月8日(9月4日は休み)までの7日間実習に参加させて頂いた。1日から6日までは毎日違う動物の担当飼育員の方ついて下さり、朝から夕方まで飼育業務を行った。残りの2日間は教育普及担当の福守さんと一緒に教育普及についての実習を行った。

1日目はサル舎、レッサー舎、ツル舎で実習を行った。午前中はサルに給餌をしながら投薬も行った。サルを展示室に移した後寝室を清掃した。レッサー舎に移動して獣舎の清掃、給餌をしながら器具に慣れさせる訓練や、投薬を行った。作業の合間に「ブリーディングローン」の仕組みについてや、サルの特徴・習性などについて教えて頂いた。午後からはツル舎の清掃、給餌を行った。閉園の時間が迫ってくると展示室に出ている動物たちを寝室に戻して展示室の清掃を行った。

2 日目は爬虫類館、猛禽舎で実習を行った。給餌と獣舎の清掃のほかにショウガラゴに与えるための昆虫採集や、ゾウガメに与えるための草刈り、ハコガメの日光浴を行った。午後にはワニのエサやりライブの見学をした。子供にも理解できるようにゆっくり話したり、クイズ形式にしたりと工夫されていた。その後タヌキ、キツネ、ヤマアラシ、猛禽類に給餌を行い、展示室に出ている動物を寝室に移し展示室の清掃を行った。

3 日目はフライングケージ、ツル舎で実習を行った。朝はフライングケージ内の通路の清掃を行った。その後ツル舎周辺の草刈りとツル舎内の清掃・給餌を行った。昼休憩の前にゾウやサイなどの糞を裏山のコンテナに運んだ。午後はオグロヅルの卵を使って擬卵を制作した。平川動物公園で飼育されているオグロヅルは高齢のため、卵を産むと体力を消耗し、毛並みも悪くなる。ツルは卵があると温め続けるが自分の卵でないと温めず、また卵を産んでしまう。それを防ぐために過去に産んだ本物の卵を使って擬卵を制作するのだそうだ。

4 日目はカバ舎、キリン舎で実習を行った。カバの展示場の清掃・エサの準備の後カバを展示場に移し寝室を清掃した。カバは撒き糞をして縄張りを示すため、寝室のプールの中だけでなく壁にまで糞がついていた。清掃が終わると倉庫からカバやキリンが食べる干草を補充した。その後ゾウやサイなどの糞を裏山のコンテナに運搬した後、運搬に使ったトラックを洗車した。午後はキリンに与える葉を裏山などから枝ごと切って持ってきて寝室にペレットや干草と一緒にエサ籠に括り付けた。閉園前に展示室にいる動物を寝室に戻し、跛行の見られるオスのキリンに霧吹きを用いて蹴られないように注意しながら獣医師が消炎剤を噴霧しているのを見学した。

5 日目は触れ合いコーナーで実習を行った。トカラヤギ、ヒツジ、モルモット、ウサギを触れ合いゾーンに移動させながら異常がないか確認。跛行が確認された個体がいいたため獣医に報告し診断を行った。その後ロバ、トカラウマを展示場に移動させ給餌、獣医と共に病気の個体の治療を行った。各動物の寝室を清掃し、モルモット、ウサギの触れ合いゾーンにて随時来客対応をした。午後からは 11 月に行われる「大人のための羊毛教室」に準備で刈った羊毛をくしでとく作業をボランティアの方たちと行った。触れ合いゾーンに出ているウサギとモルモットを入れ替え、随時来客対応をした。閉園前に展示場にいる動物を寝室に移動させ展示場を清掃した。

6 日目はどうぶつ学習で教育普及について実習を行った。担当の方から教育普及についての座学を受けた後、自分で選んだ動物についてのキャプションを制作し、午後はキリンの行動調査を瞬間サンプリング法を用いて行った。

7 日目もどうぶつ学習館で教育普及について実習を行った。午前は学芸員の方の公民館へ出張講座に同行した。高齢者を対象にした講座だったため昔の写真を多く用いてスライドを作成していた。午後は動物を紹介する掲示物を制作した。誰にでも伝わり、誤解なくシンプルに的確に伝えることの難しさを実感した。

この実習を通して、飼育実習では体力と手際よく作業する事の重要性を知り、教育普及実習ではキャプションや掲示物をつくる難しさを知る事ができた。これからは動物園や水族館の掲示物にも注目してみようと思う。色々な動物の担当飼育員の下で実習ができ、数多くの知識を得られ、また、来館者と触れ合う機会も多く、動物についての知識だけでなく相手を引き込む話術についても勉強になった。

高鍋町美術館（宮崎県 高鍋町）

実習期間：平成 29 年 9 月 5・12・20・24・10 月 6 日

薬学部 動物生命薬科学科

秦 真季子

私は、宮崎県高鍋町にある高鍋町美術館で、9 月 5、12、20、24、10 月 6 日の計 5 日間実習を行った。

私が実習に行っている間に開催されていた展示会が企画展で『クレパス画×巨匠たち展』と『本田紘輝 命のあしあと展』の 2 つ、また常設展でも 2 つあり、展示替えの様子などいろいろな作業を体験できるようにと日程を調節してもらった。

実習内容として、1 日目は企画展で開催されていたクレパス画展の撤去、搬出、後期常設展の展示準備、前期常設展の撤去、梱包を行った。クレパス画展の撤去、搬出ではパッケージの企画者や美術専門の運搬チーム、物販のスタッフなど様々な事業の人が関わっており、搬出作業は美術専門の運搬チームが梱包から搬出までを行っていた（写真 1）。その他物販のスタッフは物販グッズの撤去、美術館スタッフは進行状況や今後の流れの確認、搬出作業を行っていた。常設展の展示替えでは、収蔵庫に入り、後期常設展で展示する作品を探し付箋をはる作業を行った。また、前期常設展の撤去作業では、掛け軸の取り外しや巻く作業、作品の取り外しを行った。

2 日目は、後期常設展の展示作業、企画展で開催される命のあしあと展の搬入、開梱を行った（写真 2）。後期常設展の展示作業では、作品掛けやキャプション見直し、照明のセット方法を教えて頂いた。また、企画書立案ではもしワークショップをすることになったら、どんなものを企画するかを企画書にまとめ、評価してもらった。企画展で開催される命のあしあと展とは、本田紘輝くんという 8 歳から 4 年間、脳腫瘍と闘い 12 年の短い生涯を終えた男の子が闘病中に描いた絵の展示で、本田くんの作品は、県内外の絵画展や CG アート展などで数々の賞に輝いている。

3 日目は、命のあしあと展の展示作業、社会教育課長の座講、高鍋図書館・明倫堂の見学を行った。命のあしあと展の展示作業では、アクリルカバーを静電気防止剤で拭いたり、作品の汚れの撤去、キャプションの入れ替えなどをや



写真 1: 搬出作業の様子

らせてもらった。社会教育課長の座講では、資料の取り扱いと留意点や展示会の実務についてお話があった。見学に行った明倫堂とは、昔使われていた教科書などの古文書が保管されている場所で、昔高鍋にあった学校「明倫堂」で、本をしまうために使われていた蔵だそう。その修復作業を高鍋図書館の職員さんが行ってその作業風景をみたり、実際に明倫堂車庫の中に入れてさせてもらっ



写真 2: 開梱作業の様子



3a: ダンボールからつくる



3b: たかなべ町家での制作状況



3c: 完成した作品

© Tomotatsu Gima

写真 3: 儀間朝龍氏によるアーティスト・イン・レジデンスと作品

たりした。

4 日目は、終日本田くんのお母様による命のあしあと展の講演会があり、その受付を行った。来館者の方は私を一人のスタッフとしてみているので、実際にいろいろな質問を聞かれ、受付という仕事のリアルを体験することができた。

5 日目は、アーティストインレジデンスというワークショップがあり、その準備や対応を行った(写真 3)。アーティストインレジデンスとは、一定期間アーティストが地域に滞在しながら作品制作を行うことで、今回行われたワークショップでは、段ボールのリユースによるアート作品を展開している儀間朝龍さんによって高鍋町美術館から離れたたかなべ町家で 3 日間をかけて行われた。1 日目は、段ボールでレターセットとノート作成、2 日目は高鍋のキャラクター「たか鍋大使くん」を家族で 1 作品作成、3 日間は儀間さんによる公開作成という日程であった。儀間朝龍さんがポップコラージュを始められたきっかけは、絵具を使って絵を描くことに疑問を感じ、段ボールで作品描くことを始めたそうだ。今回ワークショップの材料集めから来館者対応まで携わることができ、とてもよい体験をすることができた。

実習を終えて、美術館は、ひとつひとつの展示会で関わってくる人、事業が違い様々な職業の方が協力することによって成り立っていることが分かった。また、展示会を行う工程に携わることで、ひとつひとつの展示会に提供者側の想いが込められているという事が身近に伝わった。そして、学芸員という職業は、展示会を主催するために交渉役となったり他の事業の方との連絡をとりあったりするだけでなく、提供者側との懇親会や宿泊の手配なども含め、極めて多岐にわたる仕事があることを知り、博物館の内側をみる良い経験ができた。

宮崎市フェニックス自然動物園(宮崎県 宮崎市)

実習期間：平成 29 年 9 月 4 日～ 11 日

薬学部 動物生命薬科学科

松尾 勇士

9 月 4・5・7～11 日の 7 日間、宮崎市フェニックス自然動物園で実習を行った。宮崎市フェニックス自然動物園は、指定管理者制度に基づき宮崎市が出資し宮崎市フェニックス自然動物園管理株式会社が管理・運営する宮崎県内唯一の動物園であり、遊園地と夏期限定のプールが併設されている。

一日を通してヤギの太行進、フライングフラミンゴショー、チンパンジーの知能実験など様々なショーが行われており、独自の内容で他所ではなかなか見ることのできない動物たちの様子をうかがう事ができる。夏休み期間はサマースクールと呼ばれる小学生を対象とした飼育体験学習が行われており、他にも夏期限定のプールや子供向けの遊園地も併設している。年間を通して遠足で来園する子供や家族連れで賑わっている。実習中の課題は特になく動物が好きで

飼育員の普段の仕事を体験したい人、動物と身近でふれあいたい人にはおすすめの実習先ではないだろうか。

実習の準備物は日程調整のためのメールのやり取りの際に園の方から指示があり、防疫のため作業用の衣服を事前打ち合わせの段階で持っていくか郵送で送る必要がある。私の場合は、実習開始の一週間前にあいさつを兼ねてアポを取り直接持って行った。

1日目、2日目はフラミンゴ村でフラミンゴやインコ、オウムの餌やり、掃除、フラミンゴショーの入口係、ミーアキャットの餌の準備など体験した。

3日目、4日目は、こども動物村でふれあい動物の担当を体験した。ここでは、ヤギ、ウサギ、モルモット、ポニーなどの餌やり、掃除を行った。こども動物村では、希少生物であるアマミトゲネズミの繁殖研究が行われており剥製の展示や保管もされていた。

5日目、6日目は、北区でハナジカ、水鳥等の餌の準備や掃除をした。飼育の合間に餌箱や道具の修理や補修を行った。道具等は飼育員の手作りが多く飼育の空いた時間に作っているようだ。

最終日の7日目は、南区で鳥類の餌やり、清掃を行った。最後にフライングフラミンゴショーを見学し出口園長への質疑応答があった。その話のなかで、動物園は日々新しくなるべきであり、可能な限り自然と近い形で飼育したい。それが動物福祉に繋がるが現代社会においては、色々な制約がありなかなか実現できないという話があった。見る側の立場としても、より自然体な動物を見られる動物園への憧れが強くなった。

まとめとして一週間の実習を終えて、ただ飼育するだけでなく、餌の種類や大きさを動物種や個体差に合わせて準備しており、動物への接し方、掃除の様子など細かいところで動物の事を一番に考えている事が伝わってきた。

ある飼育員の方の話で、今いる種をどのようにして守るのか、その方法を模索しより良い方法を探す。そのために他の館との連携を深め動物の貸し借りや情報の共有、希少動物の死後は後世に骨格標本やDNAなどできるだけ情報を残すこと。動物を飼育していくなかでわずかな身体的変化や行動的变化を見逃さず、それが生態や体調にどう影響しているのか、なにが原因でそのような行動をとるかを考えるのが大切であると知った。

希少動物を増やすだけでなく、遺伝的多様性の確保が動物園の持つ種の保存に対して大きな役割を果たしている。そのためには、剥製や標本の作成のため他の博物館との連携を深め協力関係を築いて行く必要があると感じた。それを踏まえて日々、動物がより良い環境で生活できるように配慮しつつ、感染症や怪我のリスクを最小限に抑える工夫が必要不可欠であると理解した。また、動物園は接客業としての面も強く動物だけでなく来園者も快適に過ごす事のできる空間になるように話し方や話すスピードに気を使っていた。

今回の実習で、動物園の職員の日線（目線）で動物や来園するお客様と接し、普段見られない動物園の仕事を体験した事は今後の生活において大きな財産になった

のではないだろうか。学芸員の仕事をするうえで現場の職員の視点から博物館を見ることは、普段の授業では学べない多くを知る良い経験になった。

篠栗町歴史民俗資料室 (福岡県 篠栗町)

実習期間：平成 29 年 9 月 4 日～ 15 日

薬学部 動物生命薬科学科

松谷 梨花

私は福岡県粕屋郡にある篠栗町歴史民俗資料室に、今年の 9/4～15 の約 2 週間実習に参加した。この資料室では地域文化の情報発信基地として歴史、民俗、埋蔵文化財、古文書などの貴重な史・資料を収蔵、展示しています。

建物は 2 階建てで 1 階は主に収蔵展示室であり、地域で収集されてきた生活用品、年中行事の用具、昔懐かしいおもちゃ、山仕事の道具、農耕具や戦時中に使用されていた貴重な民俗資料が展示してある。2 階は常設展示室で、歴史、農具、考古、炭坑など多くのコーナーがあり、先人たちが築き上げてきた地域の文化や、歴史コーナー別に展示されていた。また 1 階には町内の文化財調査や保護活動、啓発活動などを行う文化財事務所がある。実習では毎日異なった内容を体験する事ができた。

土器の復元作業はバラバラになった土器の破片を、ジグソーパズルのように試行錯誤しながら組み合わせていくもので、小さな破片から大きな破片まで、数多く、表と裏の土器の模様が似ているものを探していく。これがなかなか合うものが少なく、大変であった。組み合わせがうまくいき、重なったらチョークで割れ目をマーキングし、接合する。接合後は一度クリップではさみ、接着剤が乾くまで固定しておく。完成品は高さ 70cm 幅 50cm ほどの大きさの器になった。破片が足らず、隙間が生じる部分は石膏で補填する。

次に実測とトレースを行った。始めに 1 時間ほどかけてやり方を教えてもらったものの、実際にやってみると思うように手が進まない。実測は A3 の方眼紙に計測する対象の表面と断面を三角定規やデバイダーを駆使し図化していく作業で、本来一部分しか残っていない状態でも描いていく場合もある。今回は完成品を使って実測したが、描く際に注意点も多く、1 回では頭に入りきれずに思っていた以上に時間がかかり、ミリ単位での作業だったので神経を使った事もあり、とても疲労した。今回、1 枚の方眼紙に 1 つの土器を描いたが、本当はそこに、あと 5 つほど描くという事で慣れていないと本当にきついと感じた。

次に画像処理・編集について。作業ではフォトショップを使用した。学内実習で一度使ったので、その時の経験が頭に残っていたものの、自分のノルマを達成できずにとっても時間がかかってしまった。今回処理した画像は『ささぐり紀行』と言って地域の広報を掲載したものを編集した。実物は小さな冊子になっていて、ウェブで閲覧する事もできる。もともとある文章と写真のレイアウト

を自分たちで考え、見栄えをよくしていった。しかしこれも文字と画像の配置がどうやったら見栄えが良くなるのかを考えるのが思うように進まず、苦戦した。普段、私たちが手に取っている本や雑誌も上手にレイアウトされているので、その工夫はすごいなと感心した。

パネル・キャプション作成も体験した。1階にあった収蔵展示室のキャプションが古くなってきたので、内容も少し変えて新しいものにした。実習先は展示物が多い事もあり、キャプションの内容は簡潔にしてある。そのキャプションの一部を作り直す作業を行ったが、地元の小学生(3年生)がよく来るという事で、堅くなりすぎずわかりやすい言葉で表さなければならなかった。学内実習の時にワークショップを担当し、小学生の子でも興味をもってもらい参加してくれるかを考えたが、今回も幅広い世代の方が理解してくれるようなキャプション作りになった。

これ以外にも土器の洗浄、公園での矢尻(石鏃)の表面採集、山を歩いての霊場巡り、寄贈品の聞き取り調査、小郡にある九州歴史資料館への見学、雨の日はまがたまづくりを地域の人たちと行った。これは久しぶりにやって楽しめた。今回実習をやって初めての経験も多く、驚くことが多かった。もともとは歴史への興味関心はそれほどでもなかったが、初日から楽しいという思いで作業ができた上に、考え方も変わり、いい経験となった。

大分市美術館(大分県 大分市)

実習期間：平成29年8月28日～9月8日

薬学部 動物生命薬科学科 4年

宮崎 明音

大分市美術館は平成4(1992)年の2月に開館し、上野丘子どものもり公園内に位置し、「たのしんで・みて・まなぶ」美術館として、年間を通じて所蔵の美術品が鑑賞できる常設展やさまざまな優れた分野の美術を紹介する特別展の開催、各種講座・講演会の開催など、子供から大人までだれもが幅広く楽しめる生涯学習施設としての美術館運営をめざしている(大分市「大分市美術館の概要をご案内します」：<http://www.city.oita.jp/www/contents/1299633573373/>平成29年12月参照)。

私はこの大分市美術館にて、8月28日から9月8日までの土曜日、日曜日を除いた10日間実習に参加させて頂いた。実習生は私を含め9人で、時間割によって学芸員さんや市の職員の方から教わるというかたちであった。前半の5日間は主に講義で、後半5日間は主に実習であった。

1日目の午前、自己紹介や大分市美術館の概要の説明などのオリエンテーション、施設見学を行った。オリエンテーションでは、実習中に提出する課題レポートの説明もあった。内容は、「地域における美術館の役割は何か?」と「企

画展を計画する」というものであった。企画展の計画レポートの内容はすべて自由であった。午後は、展示場にある温湿度計の紙の交換を行って、収蔵作家および作品についての講義を学芸員さんから受けた。この日の実習では、温湿度を記録する事が資料を保管する上でとても重要な作業であり、大分市美術館の資料は大分市出身・在住、またはゆかりのある人物の優れた作品であるという事を学んだ。

2日目の午前は、館長さんから、「大分市美術館の使命と役割」という講義を受けた。美術館の起源や歴史、美術館活動の基本である5つの柱について、大分市美術館のミッションなどの内容であった。午後は、学芸員さんから、「展覧会の企画運営について」という講義を受け、展覧会の種類や企画運営のポイントなどを学んだ。市美の目線で詳しく話が聞けたので勉強になった。展示場に行き、紙本と絹本の見分け方や展示物の裏事情などを聞く事もでき、新鮮な講義でもあった。

3日目の午前は、広報担当の方から、大分市美術館における「広報について」と「ボランティアについて」の講義を受けた。多くの人に美術館へ来てもらうために様々な媒体を使って宣伝を行い、多くの事に気を付けながら展覧会等のイベントの周知をしていた。午後は、学芸員さんから「市役所が計画する推進事業について」という講義を受けた。大分の街の昔の写真を見て、そこに写っている建物が何で、どの時代のものかなどを二班に分かれて調べ、発表した。自分で「まちなかイベント」の企画も行った。この講義で、市役所と美術館がどのように連携してまちなかの活性化に寄与しているのかを知った。短時間で案を出して、自分の言葉でそれを説明する事の難しさも改めて実感した。

4日目の午前は、館長から、「美術館の原則と美術関係者の行動指針」という講義を受けた。この講義は内容が難しかったが、動物園や水族館を含む博物館全般にも通じる所があり、とても勉強になった。午後は、「近世絵画の解説と取り扱い」という講義を受けた。掛け軸の名称や掛け方、しまい方を習った。箱の紐の結び方も習った。この講義を受けて、資料を扱う時は、1つのやり方にとらわれるのではなく、臨機応変に対応する事の重要性を学んだ。

5日目の午前は、前日に引き続き「近世絵画の解説と取り扱い」の講義を受けた。大分の有名な作家である田能村竹田の話や、南画についての解説を聞いた。実際に、高倉観岸の掛け軸装を鑑賞し、作品の調書も記録した。学芸員の方が普段どのように作品を調査しているかを知れた。午後は、美術館での「教育普及」についての講義を受けた。教育普及担当の方は、学芸員でも市の職員でもなくて、中学校の美術の先生であった。活動としては、ワークショップだけではなく、小学校等に出前授業を行っていた。現在は、「対話型作品鑑賞」というものがあり、この講義ではそれを実際に体験出来た。子ども講座で扱うアイロンビーズの試作もさせてもらった。教育普及のこの講義が私の中で一番心に残っていて、すごく新鮮で、とても自分のためになった。

6日目は、ほぼ1日資料整理で図書の分類を行った。大分市美術館は図書の

量が多く、資料整理が全然出来ていなかった。学芸員の方たちが多忙で資料整理を十分に行える状況にはないという事を知った。資料整理は円滑に、効率よく仕事をするためには欠かせない基礎的な作業であり、美術の種類を細分化して、同じようなグループごとに図書を分けるのがとても大変だという事を身をもって体験出来たので良かった。合間に、普及班のボランティアの方たちとエコバッグを作った。簡単に作れて楽しかったし、ボランティアの方たちの普段の作業も知れたのはとても勉強になった。

7日目の午前は、館内の害虫モニタリングと常設展の準備を行った。害虫は資料を食べてしまうので、どこにどんな虫がいたかを詳しくモニタリングした。常設展の準備は実際に収蔵庫に入り、次の常設展で展示する洋画を探した。高額な作品を実際に自分たちで探して運ばせてもらったのでとても緊張したが、滅多に出来ない経験が出来たのでとても良かった。収蔵庫の整理がいかに大事かも身を以って知る事が出来た。午後は、館内のポスターの張り替えと害虫トラップの設置、収蔵庫の掃除を行った。館内のポスターは2週間に一回張り替えられていて、他県の館のポスターも張られていた。そういった面でも、他の館と協力しているのが分かった。収蔵庫の掃除も資料のために必要な基礎作業であり、学芸員さんは多くの業者さんに関わるという事も理解し、とても勉強になった。

8日目の午前は、総務担当班の方の講義を受けた。芸術とは直接関係のある仕事ではないが、資料や備品の入札などの貴重な話が聞けてとても勉強になった。ミュージアムショップの販売員さんのお仕事も体験させてもらった。ショップの方と学芸員さんが協力して商品を作っているのを知り、とても驚いた。また、警備の方の仕事内容も聞いた。美術館の裏側を見る事が出来た。午後は、前日に引き続き常設展の準備と実習期間中に実際に展示してあった人形の素材を確認させてもらった。人形に興味のある実習生が、髪の毛はどんな素材が使われているのかと質問をしたところ、展示ケースをわざわざ外し、触って確認させてくれたのはとても驚いた。実習生の何気ない一言で、こんな大掛かりなことをさせてもらってとても貴重な体験が出来た。

9日目は、美術館で定期的に行われているアートカレッジの手伝いと課題であった企画展の計画をした。アートカレッジの手伝いでは、受付の係を実際に体験させてもらった。ボランティアの方やお客さんに関わる事が出来たのは、とても勉強になった。企画展を考えるのはとても難しかった。大学の授業で一度やったことがあったが、その時のものよりも具体的で、現実的な内容を考えなければいけなかった。私がこの実習で学んだことを全て活かし、かつ、想像力を働かせて考えるのはとても大変だった。1つの企画展を開催するのがいかに大変で、長い時間を費やさなければならないかも少し理解出来た。

実習最終日である10日目は、各自計画した企画展の発表を行った。私は、『COCO・CHANEL という生き方』という企画展を計画した。名称、趣旨、構成、会期、開館時間、会場、主催、後援、観覧料、関連イベント、展示場の配置な

どを考えた。こんなに細かく企画展を計画したことがなく、とても難しかったが、自分の夢を盛り合わせて自由に計画出来たと思う。発表後には、学芸員の方や他の実習生たちからアドバイスを受けた。自分では考えつかないような考えや、どうしたらより良いものになるかを教えてくれたので、とても勉強になったし、新鮮で面白かった。

10日間という短い期間ではあったが、この実習で私は実に多くの事を学習した。美術館の学芸員という仕事は優雅な職業のようで、実際はとても泥臭いものだというのを実際に体験しないと絶対に分らなかったと思う。美術館の裏側であったり、そこで働く様々な人たちの役割というものをきちんと知る事が出来たのもとてもいい勉強になった。大変な面ももちろんあったが、全体的にはとても楽しくていい思い出になったし、学芸員という職業をきちんと知る事が出来てとても良かったと思う。

八代市博物館・未来の森ミュージアム(熊本県 八代市)

実習期間：平成 29 年 8 月 2 日～ 8 月 7 日

薬学部 動物生命薬科学科 4 年

宮本 菜波

今回実習に参加した八代市博物館・未来の森ミュージアムが設立されたのは、昭和 50 年代からの計画があった。昭和 54(1979)年には八代市教育文化センター建設準備室が設置され、昭和 63(1988)年博物館の分離独立建設が決定。平成 3(1991)年 2 月には「八代市博物館未来の森ミュージアム」の名称が決定され、同年 10 月に開館。博物館には第 1 常設展示と第 2 常設展示があり、第 1 常設展示では主に考古遺物、民俗資料、妙見祭関連資料、八代焼、寺社資料、古文書。第 2 常設展示では、江戸時代、肥後藩の筆頭家老をつとめ、八代城に居城した松井家に伝わる歴史・文化遺産の各分野を常設展示している(「沿革 開館までの歩み」：<http://www.city.yatsushiro.kumamoto.jp/museum/date/index.html> 参照)。

実習は事前に配布されたスケジュールにそって行われた。実習時間は 9:00～17:15 であり、実習生は 3 名で行われた。実習内容を次の(表 1)にまとめた。

1 日目はガイダンスで館内の構造や収蔵庫案内、常設展示と特別展示の説明、館内見学を行った。その後博物館でどのような方々が働いているか、八代市博物館未来の森ミュージアムの特徴について学んだ。座学の講義では大学の学芸員課程で学習した項目を復習しながら学ぶ形だった。午後からは民俗資料の取り扱いと古文書についての講義を受けた。民俗資料について有形文化財(実際に触れて体験することが可能)と無形文化財(変化に応じてどうにでも変わる)の特徴について学んだ。座学後、実際に何の情報も知らされていない民具を目の前にし、自分なりにどの様に使われているかを考え、実習生で話し合い発表を行った。

表 1: 八代市博物館・未来の森ミュージアムでの実習スケジュール

月/日(曜日)	実習内容
8/2(水)	・ガイダンス ・館内案内 ・博物館資料の取り扱い(民俗) ・古文書の調書作成
8/3(木)	・博物館資料の取り扱い(染織・工芸) ・古文書の写真撮影
8/4(金)	・子ども体験講座 準備 ・古文書の展示、企画立案
8/5(土)	・子ども体験講座 当日 ・古文書の解説文の執筆
8/6(日)	・博物館資料の取り扱い(絵画・陶磁器) ・寄贈品の整理
8/7(月)	・古文書のキャプション・解説パネル作成 ・古文書の展示作業

古文書の学習では、資料の調査研究から展示までと題し、本物の古文書を手に取り形状・法量・作者・宛名・時代を教えて頂きながら、博物館資料台帳に調書を取り、解説を行った。最終日に実際に展示を行う為、実習生で話し合い作者の花押に注目し、花押の変化が時代の流行と共にどのように変化してきたか、また人物の特徴がどのように出ているかに注目し調べを進めることになった。

2日目は染織・工芸資料の取り扱いと古文書について学習した。染織の扱いでは江戸時代、肥後藩の筆頭家老をつとめ、八代城に居城した松井家に伝わる実物の着物を使用した。刺繍の種類や、染め方の種類、縫い方の違いの講義を受けた後、ルーペで拡大しながら観察した。また工芸資料の取り扱いでは、漆工芸品の煙草盆と重硯箱を間近で観察した。金箔の繊細さや模様にはすべてに物語が隠されている事を学んだ。

午後からは古文書について引き続き調査した。調書に必要な写真撮影を行った。写真の撮り方はもちろん、カメラの仕組みから、光の取り込み方まで細かく学ぶことが出来た。資料に対し光の量が均等か照度計を使い調べた。平面の資料と立体的な資料の撮影では撮り方が違うということを知った。1枚撮影するだけでもとても時間がかかり大変であった。

3日目は次の日が子ども体験講座であり、銅鏡と富本銭(日本最古の貨幣)のレプリカをつくるので事前に体験し、明日の作業の流れの確認を行った。合金を鍋で溶かし5分弱待った後、型に慎重になおかつ素早く流し込み約5分、固まるまで待つ。型から外し周りの凸凹を紙やすりで削り、模様のある表面はスチールタワシを水で濡らしながら優しく磨いて完成させ、全ての作業を説明できるように練習を行った。

午後は全部で6つある古文書の配列について実習生で議論した。花押に焦点を置いていて調査してきたので、来館者に花押を意識して見て頂くために年代別か花押の特徴別に配列するかとても難しかった。また自分の担当する資料に

ついて、何を聞かれても答えられるよう、自分自身が理解できていない部分は辞書を使い、隅々まで調べ担当の学芸員の方に発表して修正を繰り返した。

4 日目は子ども体験講座本番。昨日行った流れで銅鏡と富本銭を作ってもらった。子供たちがとても興味津々で積極的に作業していたので、スムーズに対応できた。銅鏡と富本銭がそれぞれ製作され・使用された時代ではどのような意味をなしていたか、子供たちにも分かるように寸劇を行った。

午後からは古文書のキャプション作りを行った。200 字程度でキャプションを作成するよう指示され、分かりやすくそして簡単にまとめるのがとても大変で、何度も修正を繰り返した。最後にキャプションのキャッチコピーを約 15 字でまとめる作業がとても難しく、1 つの資料のキャプションとキャッチコピーを考えるのに半日もの時間がかかる大変な作業だという事を痛感した。

5 日目は博物館に寄贈された大量の白黒写真の整理を行った。1 箱に 300 ～ 700 枚の写真が入っており、寄贈の手続きの際正確な情報を記さなければならないので、ひたすら枚数を数える作業を行った。また枚数だけでなくネガが何本入っているか調べた。白黒写真で現像してあった為、カラー写真に比べ劣化が少なく良い状態で残っていた。写真を資料として残しておく場合は、カラー写真より白黒写真の方が劣化が少ないため最適であると初めて知ることが出来た。

午後からは掛け軸の取り扱いについて講義を受けた後、本物の資料を使い取り扱いについて学んだ。大学の講義で掛け軸については 1 度学んでいた為、復習しながら実践した。

最終日は、今まで調査してきた古文書の、キャプションをのりパネルに貼りカットする作業を行った。のりパネルに貼る際に空気が入らないように、カットする際に切り口が斜めになるように、カッターで切るなど様々なことに注意しながら作業を行った。その後資料の展示室の片づけと掃除を行った。資料を展示する際に隣の資料とのバランスを考え、キャプションの高さ、資料の位置などメジャーで細かく測りながら微調整を行った。最後に博物館の職員の方々の前で発表し、質問にもきちんと答えることが出来たので 6 日間頑張って調査してきて本当に良かったと実感した。

6 日間の実習を通し、1 つの資料に対し、調査・研究し展示を行うまでの一連の流れに、膨大な時間が必要であると身に染みて感じる事が出来た。自分があまりにも無知すぎて、調査していく際に挫折しそうになったが、学芸員の方々が協力してくださり完成させることが出来た。最初はただの 1 つの資料だったが、1 週間かけて調査していく中で最終日には自信をもって展示することが出来た。大学の講義で学芸員について学んでいるが、実際に体験してみると、想像していた事とは違う点が多々あり、とても勉強になった。資料を扱う際に慎重に、そして展示中の資料には常に目を配り、資料やキャプションが傾いていないかなど、些細な変化に気づく大切さを学んだ。常にあらゆる所に目を配る大切さは今後にも活かしていきたい。

いおワールドかごしま水族館（鹿児島県鹿児島市）

実習期間：平成 29 年 9 月 1 日～ 14 日

薬学部 動物生命薬科学科

室田 彩華

いおワールドかごしま水族館は、鹿児島県鹿児島市本港新町にある鹿児島市立の水族館で、「沈黙の海」という水槽が印象に残る水族館だ。

私はこのいおワールドかごしま水族館にて、9 月 1 日から 14 日までの 4 日、8 日、11 日、12 日を除いた 10 日間実習に参加させて頂いた。実習生は私を含め 2 人で、事前に頂いたスケジュールによって担当の方に教えて頂くかたちであった。

1 日目の午前中は、オリエンテーションと水族館の説明、館内の設備の見学をした。午後は、飼育員の方がするアクアラボの見学、最終日に発表する課題の説明、給餌の手伝い、酸素濃度測定と水温測定の記録をした。課題はわくわくはっけん広場に展示するもの、来客者に講演をする、飼育員の方に企画を提案するというものの中から 1 つ選んだ。初日ということもあり緊張したが、飼育員の方皆さん優しく指導して頂けたので、魚の生態など気軽に質問することができた。カブトクラゲの給餌が難しかった。

2 日目の午前中は、開館前の見回り、黒潮大水槽の給餌、他の水槽の調餌と給餌をした。給餌をしながら、担当の方からカクレクマノミとイソギンチャクの生態と共生について教えて頂いた。午後は、アクアラボ見学、潮風フェスタの設営の手伝い、1 人で水温測定を行った。バックヤードで迷子になり、水温測定に時間がかかったが飼育員の方に場所聞きながら測定を終えることができた。

3 日目の午前中は、開館前の見回り、いおっ子海っ子体験塾の打ち合わせ、会場設営、体験塾で行うゲームの予行を行った。午後は、さかなクンの講演を聞いた後にいおっ子海っ子体験塾の手伝い、体験塾の反省会をした。多くの子どもと関わる機会が今までなかったので、接し方が難しかったが、一緒にゲームをしたりするのは楽しかった。さかなクンの講演を聞く機会があり良かった。

4 日目は総務課業務だった。午前中は、水族館の概要の説明、ガイドツアーに参加し水族館の説明をした頂いた後に、来館者のアンケートをパソコンに入力した。午後は、ショップのレジの手伝い、改札、総合案内、券売を教えて頂いた後に、アザラシショーの見学、パンフレットにシールを貼る作業、来館者のアンケートをパソコンに入力した。どの展示が人気なのか、ショップに求めるのは何かなどアンケートによって多くの事がわかった。また、来館者の多くは年間パスポートを持っており、一方、水族館には職員だけでなく、ボランティアの方も多し事を知った。

5 日目は海獣飼育だった。午前中は、調餌、イルカ水路の柵と手すりについた火山灰とごみの除去、イルカの呼吸数を測定、イルカ水路のショー見学、温度測定、ロープのぬめりをとる作業をした。午後は、イルカとアザラシの薬を

オブラートに包む作業、調餌室の清掃、イルカ水路でのトレーニング見学、イルカショーの裏の仕事見学（音響、画面切り替えなど）、イルカ水路のごみとり、イルカ水路のイルカを室内に戻す作業をした。イルカの個体識別が難しく、呼吸数を数えるのが大変だった。何種類かの薬をオブラートで1つにまとめ、魚の中に入れて与えるという事を知った。アザラシが人に慣れるようにずっとラジオをつけていることも知ることができた。

6日目も海獣飼育だった。午前中は、イルカの検温・検便・搾乳、イルカ水路のイルカを室内に戻す作業、パラソルの片付け、調餌をした。午後は、スネアの染色の手伝い（排卵周期を調べるため）、イルカショーのバックヤードでの仕事を見学した。イルカへの指示出しやその体について教えて頂いた。バックヤードの説明、トレーニング見学をした。この日は実際にイルカに触れる事ができたが、その際80のサインをイルカは覚えているという話や、水族館によってサインが異なっている事を初めて知った。薬や染色について獣医さんから教えて頂けたので良い経験になった。

7日目の午前中は、開館前の見回り、調餌、水温測定、担当の方からクラゲについて教えて頂いた。午後は、アクアラボの見学、展示課の方にわくわくはっけん広場とタッチプールの説明をして頂き、給餌、逆洗の見学、水温測定、エフィラの換水を行った。クラゲをスポイトで吸い上げ、移す作業が大変だった。

8日目の午前中は、開館前の見回り、調餌、黒潮大水槽の給餌を見学、黒潮大水槽の酸素濃度測定、いおの日の手伝いをした。午後は、アクアラボの見学、いおの日の手伝い、水温測定、エフィラの換水、ロープの仕分け、給餌をした。数の多いエフィラをスポイトでとる作業は大変だが、成長してクラゲになるのは少ないと聞き、育てる事の大変さを知った。いおの日の手伝いで、小さい子と関わり、この子らに向けた説明の仕方を学んだ。

9日目の午前中は、開館前の見回り、調餌、給餌、水槽の掃除を行った。午後は、課題作成、来館者の前で発表のリハーサルをした。水槽の掃除は力を入れてこずってもなかなか汚れが落ちなくて大変だった。給餌の時水槽の上からのぞくとネズミフグがあがってきて、餌をねだって口をパクパクする姿が可愛かった。課題を発表する前に来館者に声をかけて聞いてもらうまでが大変だった。

10日目の午前中は、開館前の見回り、調餌、水槽の塩分濃度測定、水温測定を行った。午後は、課題を来館者の前で発表、午前中に終わらなかった塩分濃度と水温の測定、給餌、エフィラの数かぞえを行った。最終日という事もあり、バックヤードで迷うことなく測定を行えた。前日と同じで課題を発表するまでが大変だった。一方的に説明するだけになってしまったので、来館者を引き付けるためのアドバイスを展示課の方から頂けた。初日よりカブトクラゲの給餌が上手くできた。

この実習を通して、生き物の管理をする大変さ、来館者に興味を持って頂ける展示や説明をする大変さを知ることができた。また、飼育員の方だけではなく総務課の方の仕事の重要性を知り、どちらの役割も欠かせないのだと学んだ。